

## 《特別寄稿》

## ニュージーランド海外研修 25 年の足跡

新井正彦\*

1990 年の開学以来実施されてきた、ニュージーランド海外研修は「語学の重要性、異文化体験による視野の拡大」を念頭に、新入生の必修科目（現在は選択科目）として設けられ、2015 年度で 26 回を重ねた。

2014 年度は 25 周年という節目を迎え、提携校のマッセイ大学では大学主催の 25 周年記念レセプションを開催してくださり、この研修の持つ歴史の重みを改めて実感した。

本学における「海外研修の目的」は、下記に列挙した 5 つのねらいによるものである。

- (1) 国際人として成長するための重要な教育機会である
- (2) 生きた国際コミュニケーションのツールとしての英語力を育成する
- (3) 海外の異文化を理解し、相手国の社会や文化について学ぶことによって、国際理解のための能力を高める
- (4) ホームステイを通じ、欧米の生活、地域社会などのルールを学び、我々日本人の暮らしや文化との比較のなかで自分の生き方を考える契機となる
- (5) 日本を含む環太平洋文化圏の重要な友好国としてのニュージーランドの多様な社会文化や政治経済などについて理解し、訪問先の大学や地域との交流を通じて、国際親善に貢献する

また、研修実施に際し、ニュージーランドが研修先選ばれた理由として以下の 5 つの点が挙げ

られる。

- (1) ニュージーランドは北半球にある日本とは反対の南半球にあり、季節は逆であるが、両国とも広大な自然に恵まれ、時差もあまりなく学ぶ環境として快適である。
- (2) イギリスの古き良きヨーロッパ文化の伝統を残し、明るく社交的な国民性を持ち、しかも日本と友好国で留学生の受け入れに熱心である。
- (3) 先住民族や東南アジア系、中国系、欧米系など多様な民族が共生する多民族国家であるが、生活習慣は堅実で、極めて犯罪が少ない。
- (4) 両国の大学や高等教育機関の学問の水準が高く、かつ英語を第二外国語として学ぶ学生のため英語教授法を研究した教員が多い。学生交流の実績があり、指導を安心してお願いできる。
- (5) ホームステイで日本人学生を家庭で迎えてくれる家族が多く、日本人学生とのコミュニケーションやホストとしての経験が豊かなファミリーが多い。

この海外研修のねらいは、語学研修と異文化体験である。現地では原則的に、学生一人に一家族のホームステイ滞在を義務づけている。一日の研修内容は、午前中（9 時から 12 時）が語学研修、午後はホストファミリーと過ごすか、またはアクティビティを選択し、ニュージーランドの文化に触れるように組まれている。

この海外研修の形態が「新入生全員参加を原則とし、研修実施期間は 8-9 月の 3 週間」となったのは第 2 回目（1991 年度）からである。第 1 回

\* 江戸川大学 マス・コミュニケーション学科教授

目は12月に実施し、期間は2週間、参加は希望選択というものであった。最初に研修の受け入れ校となったのはワイカト大学（ハミルトン市）、マッセイ大学（パーマストン・ノース市）、オタゴ・ポリテクニク（ダニーデン市）の3校である。各コースとも原則全員ホームステイであったが、オタゴ・ポリテクニクでの研修に参加した男子学生のみホームステイかドミトリー（大学生寮）の選択が可能であった。

第2回目から海外研修は応用社会学科、マス・コミュニケーション学科2学科の新入生の必修科目となり、研修期間は9月の3週間、全員ホームステイに切り替えた。これはドミトリーの場合、授業後に日本人ばかりが集まり、宿舎に帰っても英語での会話がほとんどなかったことによる。研修校もカーリントン・ポリテクニク（オークランド市）、クライストチャーチ教育大学 CCEL（現・カンタベリー大学教育学部 CCEL クライストチャーチ市）の2校が加わり5校となった。参加人数も1回目の104名から389名という巨大プロジェクトとなった。

第3回目からウエリントン教育大学（ウエリントン市）、リンカーン大学（クライストチャーチ市）の2校が加わり、オークランド市での研修校はオークランド教育大学（現・オークランド大学教育学部）に変更された。これによりニュージーランド主要都市の国公立大学での海外研修実施（6都市7コース）という原型が確立された。

第6回目にマッセイ大学アルバニー校（オークランド市近郊）が研修校に加わった。

第7回目から若干の変更がなされた。前年の1995年度までは各コースとも2学科学生の交流を図る意味で両学科混成グループであったが、1996年度からマス・コミュニケーション学科の学生は北島の大学で、応用社会学科の学生は南島の大学で研修することとなった。研修も語学だけでなく、学科の方針に沿った異文化コミュニケーションを重視する方向に転換した。

1997年度の環境情報学科新設に伴い、第8回目からはオーストラリアのキャンベラ大学（キャンベラ市）、モナッシュ大学（メルボルン市）の2

校が研修校に加わった。環境情報学科（現・現代社会学科）のオーストラリア研修は必修ではなく希望選択である。第9回目からはモナッシュ大学は環境情報学科、キャンベラ大学はマス・コミュニケーション学科の研修校となった。オーストラリア研修は第16回（2005年度）まで実施された。

2006年度から2学部5学科の新体制となり、「海外研修」もマス・コミュニケーション学科は必修、人間心理学科、ライフデザイン学科（現・現代社会学科）、経営社会学科、情報文化学科の4学科は希望選択となった。また、2013年度からマス・コミュニケーション学科も希望選択となり、2014年度からはこどもコミュニケーション学科が新設されて2学部6学科体制となったことにより、ニュージーランド海外研修も新カリキュラムによる科目改変が行われた。従来の3週間のニュージーランド海外研修を「ニュージーランド研修Ⅰ」（1年次配当6単位）とし、さらに英語力向上を目指す学生のニーズに応えるべく、4週間の長期研修として「ニュージーランド研修Ⅱ」（2年次配当6単位）を新設した。また、例年2-3月で実施されている6週間のスコラシップ英語特待生短期留学を「ニュージーランドスコラシップ」（自由科目6単位）として単位認定することとなった。これにより、学生は希望すれば半年に1回のペースでニュージーランドへの研修留学が可能になったのである。

2009年度、マッセイ大学とオタゴ・ポリテクニクの両校と、それぞれ海外研修提携20周年を迎え、その翌年2010年度にはカンタベリー大学 CCEL とも海外研修提携20周年を迎えることができた。マッセイ大学とオタゴ・ポリテクニクとの「海外研修提携20周年」は、ニュージーランドの地元新聞でも大きく報道された。

そして2014年度、マッセイ大学と「海外研修提携25周年」を迎えることができ、マッセイ大学では大学主催の記念レセプションを開催してくださった。2009年の提携20周年を迎えた時に、Ian Warrington 副学長（当時）は、「マッセイ大学は100年の歴史があり、その中でも20年という長きにわたる江戸川大学との提携はたいへん

重要な位置を占めるものです。」と述べられた。25 周年の記念レセプションでは、Stuart Morriss 副学長も「このたび提携 25 周年を迎えられたことはたいへん喜ばしいことであり、今後ともより一層友好関係を深めていきたいと思っております」と、パートナーシップの更なる継続と強化に言及された。

2015 年度のニュージーランド研修は、ニュージーランド主要 3 都市のマッセイ大学アルバニー校、マッセイ大学、カンタベリー大学 CCEL の 3 校での実施となった。

この 25 年間でニュージーランド海外研修に参加した学生数は 5,769 名を数え、これは本学の学生の 2 人に 1 人は海外研修を体験していることを

意味している。

海外研修の体験を通して、学生は確実に成長し多くのことを学んでいる。「自国の文化について無知なことに改めて気づき恥ずかしかった」「日本について、異国に来て初めて知ることがたくさんあった。異国を知るより、まず自分の国をもっと知ることが大切だと本当に思った」「国際人とは、単に外国語に強い人のことではない。海外でも通用するマナーや世界的な視野を身につけていなければならない」といった学生の感想や意見は、本学の目指す海外研修の「英語を学ぶとともに、異文化コミュニケーションの体験的学習と視野の拡大」という意図が、学生に反映され浸透していることを物語っている。